



# 福井県 中学校長会の窓

発行 福井県中学校校長会  
編集 福井県中学校校長会広報部  
印刷 宮田 写植 印刷  
福井市春日1丁目7-4  
TEL (0776)35-3865

第 138 号  
令和元年 7 月 16 日発行

## 第68回 福井県中学校長研究大会 坂井大会

令和元年5月10日(金)  
あわら市湯のまち公民館

### 会長挨拶



福井県中学校長会

会長 北川 裕之  
(明道中学校)

立夏も過ぎ、木々の若葉が日に日に  
つややかな緑色に変わり、初夏の香り  
が感じられる季節になりました。

本日、令和最初の記念すべき年に、  
第六十八回 福井県中学校長研究大  
会坂井大会を開催するにあたり、福井  
県教育委員会教育長 東村健治様、あ  
わら市長 佐々木康男様、坂井市政策  
監 加藤浩様をはじめ、多数のご来賓  
の皆様にご臨席を賜りましたこと厚  
くお礼申し上げます。

本研究大会は、「新たな時代を切り  
拓き、よりよい社会を創り出していく  
人を育てる中学校教育」を研究主題と  
して、これまでの研究成果を踏まえ、  
主題に迫る具体的な方策を研究・実  
践し、中学校教育の一層の充実発展に  
資するとともに、広く県民の信託に応  
えることを目的に開催しています。

先ほどは四つの分科会に分かれて、  
実践発表、研究協議をしていただきま  
した。第一分科会の主体的・対話的で  
深い学びの実現に関する研究では、そ  
うした授業が展開できるモデル化に  
ついてのこと、第二分科会の道徳教育  
に関する研究では、校長先生が集会時  
の講話に道徳的価値を計画的に入れ  
ていること、第三分科会のキャリア教  
育に関する研究では、ガイダンス機能

を充実させていること、第四分科会の  
若手教員の育成に関する研究では、メ  
ンター制度の一種の「パティシステ  
ム」を取り入れていることなど、実践  
報告から私自身たくさん学ばせてい  
ただきました。これまで研究  
を重ね発表された校長先生方、貴重な  
実践を提供いただきありがとうございます  
でした。

さて、現在は、教員の働き方改革や  
部活動運営の改革が進められており、  
どの学校も対応に苦勞されているこ  
とも思います。働き方改革について  
は、教員はこれまで、遅くまで残って  
熱心に仕事をすることが美德のよう  
に思われてきました。しかし、過勞死  
等が社会問題となり、日本全体で働き  
方改革を進めねばならない時勢とな  
りました。文科省から一月に出された  
ガイドラインや、県から二月に出され  
た学校業務改善方針なども時間外勤  
務の上限を規定しています。これには  
処罰規定はありませんが、部下の教職  
員が過勞のため病氣や死亡した場合、  
我々管理職の責任は免れません。

また、部活動の在り方については、  
県から二月に出された「部活動の在り  
方に関する方針」や各市町からの方針  
をもとに各中学校で運営方針を策定  
し、それに基づいて活動されているこ  
とも思います。県中体連でも議論さ  
れ、方針と同様の内容を申し合わせ事

項として、各顧問が遵守することに  
なっていますが、今後この内容を実施  
していくのは、各中学校長さらには中  
学  
校長会の責任と考えています。

学校の経営者である校長の権限は  
非常に大きく、また大きな責任を負っ  
ています。行政にお願いしなければ実  
現できないこともありますが、まず  
は、それぞれの学校の実情にあった改  
革を自ら進めていくことが大切です。  
反面、判断に悩むことが多いのも事実  
で、一校単独で取り組むには限界が  
あります。既に市町の校長会単位で取  
り組んでいることも多いと思います  
が、県中学校長会としても様々な取組  
について情報を共有し、学校の改革を  
進めていきたいと思っています。

また、喫緊の課題ではないものの、  
未来年表で予想されている人口減少  
社会や人工知能等の科学技術の進展  
によつて起こる様々な問題など、対応  
が容易ではない未来に備え、我々は広  
い視野を持った教育者として、それら  
を考へていかねばなりません。そのた  
めには、主体的に課題に向き合い、自  
らの可能性を最大限に発揮し、よりよ  
い社会と幸福な人生を自ら創り出す  
こと、他者と協働しながら新たな価値  
を生み出していくことが求められて  
います。私は常々、「自己改革できない  
組織は衰退していく」と考えていま  
す。令和の新しい時代にふさわしい学  
校経営をめざして、我々校長は、常に  
自己研鑽し、学校経営力を一層高めて  
いきたいと思います。

最後になりましたが、本大会の開催  
にあたり、ご指導とご支援を賜りまし  
たあわら市、坂井市をはじめ福井県教  
育委員会ならびにあわら市、坂井市の  
両教育委員会に對しまして、深く感謝  
申し上げますとともに、開催準備や運  
営にご尽力いただきました坂井地区  
の校長先生方から心からお礼申し上げ、  
開会の挨拶といたします。

## 役員名 列

令和元年度 福井県中学校長会	会長 (明道)	北川 裕之
	副会長 (春江)	林 晃司
	副会長 (上中)	竹内 久典
	会計監査 (武集)	水谷 善長
	会計監査 (松陵)	岩崎 一男
	理事(禰吉吉)	北川 裕之
	理事	森上愛一郎
	理事	柿原 大祐
	理事	坂本栄次郎
	理事(坂井)	早見 敏幸
	理事	林 晃司
	理事(奥越)	勝矢 和宏
	理事	山口 政則
	理事(鯖丹)	丸山 繁喜
	理事	橋谷 和憲
	理事(南越)	多田 順一
	理事	清水 誠
	理事	野村 哲夫
	理事(二州)	奥田 静巨
	理事	岸本 嘉宏
	理事(若狭)	竹内 久典
	理事	河原 勝視
	理事(中教研)	柴田 顕光
	理事(中体連)	土橋 雅実
	理事(教育研究)	寺崎 正一
	理事(人事行政対策)	牧田 秀昭
	理事(進路対策)	湯口 和弘
	理事(広報)	片山 幹子
	理事(学力診断)	小林真由美
	庶務幹事(庶務)	(社) 岩本 明裕
	庶務幹事(会計)	(美山) 藤井 雅之
事務局員	山下 正明	
事務局員	小島 敏弘	

# 教育長祝辞

福井県教育委員会

教育長 東村健治氏



ンの実現に向けて、順調にスタートが切れているかどうかなど、常に学校の状況を把握して、教職員が情報共有すること、そしてスピード感を持って対応していただくという心を心がけていた、ありがたいと思います。

不登校数の平成三十年度の速報値ですが、小学校では一八九人、中学校では四〇人ほど減り、五三九人。小学校では六学年で一八九人ですから、逆一学年三一人くらい。中学校では逆に五三九人で学年一八〇人。中学校にいる子供が中学校に行つて、中一ギャップということに急に休みになる場合が多いです。不登校数が、一人あるいは二人の場合に、たいした数ではないと思われられるかもしれませんが、それが積みも積もって五三九という数字になるわけですので、ぜひともこれを減らしていきたいと思っております。

皆さんこんにちは。本日は県内全ての中学校の校長先生が一堂に会して研究大会が開催されますこと、誠にありがとうございます。また生徒の学力向上、いじめ問題、教職員のメンタル面のケア等、課題にご尽力いただいておりますこと、重ねて感謝申し上げます。

新年度がスタートして十連休が開けたあと、子供さんは元気に登校されたでしょうか。四月の当初校長先生にお会いしたときに、始業式の翌日、何人休んでいたかというのを把握されていたことに、大変感心しました。本当にご努力をいただいていることに感謝申し上げます。

また、生徒がクラスになじんだか、異動してきた先生方が仕事にきちんと取り組んでいるか、スクールプラ

さて、先月には、全国学力・学習状況調査が行われ県教育総合研究所での分析が届いていると思えます。質問紙の分析がまもなく届くと思えます。少し気になったのが、読書と新聞を読む時間が減っているのが現状です。そのほかの調査はすばらしい評価を得ています。授業がよくわかるとか、ご飯を食べているとかは、すごく良くなっています。読書と新聞だけは、なぜか伸びていないので、ご自分の学校の分析ができあがったらよく調べていただきたいと思えます。

る学力の向上に力を注いでいただきたい。授業研究や校内研修などの充実を図っていただきたい。また、どのような生徒に育てていくか、生徒や保護者、地域に信頼される学校にするにはどうすればよいのか、教員に明確な方向性を示して、経験を積ませてほしいと思えます。

東京都永田町の麹町中学校がいつもでも革新的な取組をいろいろなさっているそうです。その校長先生が言うには、校長判断でできることが結構あるということだそうなので、改革を急いでいただきたいと思えます。

福井県はいま全国のプロントランナーであります。さらに伸ばそうとする、主体的な学び、対話的な学びといわれていますが、子供の自主性をどう育てるかというところかなと思っております。若い先生は、ともすると教え込みたい、子供に部活でも授業でも全て教えてあげたいという気持ち強いと思えます。だから校長先生方は、ここで教えるのを止めるか子供からどんな発案が引き出せるかということ、早めに若手の先生に教えてあげてほしいと思えます。最後まで教えなくてもいいというところを若い先生方に教えていただきたい。自主性が伸びれば、大きく脱皮できると思っております。

次に今年、中学校に入学した生徒は一年間小学校で英語を勉強して入ってきました。来年は二年勉強した生徒が入ってきます。再来年は三年、そして、四年勉強した生徒が入ってきます。だから毎年、中学一年の英語は変わっていくかといけません。六〇〇もの英単語を小学校で習ってきます。今までどおりの授業では中学一年の授業はつまらな

いということになりかねません。ぜひとも中学校の英語の先生に小学校の英語の授業をご覧いただきたい。小学校でどこまでやっているのか、というのを肌で感じていただきたい。中学校での英語の授業改革を進めていただきたい。これはものすごく重要な課題だと思っております。

もう一点、国語です。私も全国学力・学習状況調査問題を、一回全部やってみましたけれども、一番できなかったのが小学校の国語でした。私が思う読解力というのは、やはり夏目漱石の「こころ」を読んで、いろんな感情や人の心の動きが分かるのか、小林秀雄の評論の難しい文章、難解な文章を読み通すとか、そういうのが読解力と思っております。いま使われている読解力というのはどうもそうではないという気はします。

中学校は、去年は芥川龍之介の「少年」という物語と「宇治拾遺物語」の現代語訳二つ出ていましたが、今年全部説明文という類いです。高校におきましては、いま国語総合必修科目が「現代の国語」「言語文化」に変わります。もう一つ、選択科目これは「論理国語」と「文学国語」に分かれます。たぶん普通科の進学系の高校は、選択では「論理国語」をとるのではな

いかといわれております。もしかすると、大学入試から文学作品が消えるかもしれない。一つには、契約書がしっかりと読める、書ける、グラフや表などを関連付けながら報告書を書く能力が重要視される、ということになる。文章を読めるかどうかということではありません。だから小学校・中学校においては、しっかりと文学作品を読む力を付けていただきたいと思えます。

読解力が非常に難しいと思つたのは、津村節子先生からお聞きしたお話からです。津村先生のお孫さんの試験に、ご主人である吉村昭先生がお書きになった文章が問題に出てきました。「作家は何をここで述べたいと思つているか」を五択から選べという問題で、二択まで絞れましたが、どちらか分からなかった。お孫さんの母親に聞いたところ、直接、吉村昭先生に、母親が「お父さん、これどう思いますか」と聞いたところ、「これだな」と言ったのが、最初に消える選択肢だったそうです。そこで、「最後にこの二つで迷っているみたいですよ」と言ったところ、「うーん」というだけで、答えはなかったそうです。読解力とはそれほど難しいものかなという気がしました。

イギリスの試験問題には小説がよく使われ、最後の問題に「この小説の続きはどうなるかと思えますか」という設問がよく出るそうです。子供によつては、いろいろ答えが出てきて、先生方は採点するのが大変ですが、それは非常に楽しいということもあり、これも一つの読解力がみられることだと思えました。

最後になりますが、本研究大会が実りある大会になりますことを心からお祈りいたしますとともに、皆様のお祈り申し上げます。ご多幸とを心よりご記念申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

■第一分科会

「主体的・対話的で深い学び」の実現  
 ～ふるさとに誇りを持ち、主体的に「学びあう」生徒の育成～

発表者 金津中 早見敏幸

◎発表要旨

金津中学校では、これまで県教育委員会の「主体的・対話的で深い学び研究事業校」の指定を受け、授業づくりに取り組んできた。

本実践では、これまでの蓄積を生かしつつ、学習の質を一層高める授業改善の取り組みを活性化していくことが重要と考え、「わかる授業・基礎学力の定着・読書活動の充実」の三点を掲げ、以下に掲げる取組を推進してきた。

①研究組織

よくわかる授業づくりのため、全教科部会を解いた三部会に編成、他教科の実践を知ることで授業展開の新しいアイデアが生み出されたり、授業の進め方や板書の統一を図ったりすることで、生徒が取り組みやすくなることを考えた。

◎発表要旨

本校生徒は全般的に子供らしく人懐っこい性格であるが、数年前から生徒指導面で問題を抱えることが多く、特に規範意識の低さに大きな課題がある。

そこで、研究題にある道徳教育の充実と、望ましい集団づくりを図ることが喫緊の課題であると考え、以下のような研究体制を進めてきた。

①学校経営方針と研究体制  
 ○スクールプランでの位置づけ  
 「規範意識の高揚」「学校に誇りと愛



よくわかる授業づくりのため、全教科部会を解いた三部会に編成、他教科の実践を知ることで授業展開の新しいアイデアが生み出されたり、授業の進め方や板書の統一を図ったりすることで、生徒が取り組みやすくなることを考えた。

よる授業研究会の他に、教育総合研究所 国立教育政策研究所 東京外国語大学教授を招き、教科を超えた研修を進めている。

・授業公開時には、個々の教員が簡単な指導案を作成し、管理職も参加して意見交換を行っている。

・生徒が、授業の展開を意識し、見通しをもって臨めるように、「めあて」「課題」「まとめ」「ふりかえり」のシートを作成・活用することで、授業の展開を固定化させた。

・ICTを活用し、「デジタル教材を利用、他にもカメラ機能を使った振り返り学習を実践している。

・地域人材を活用し、人の生き方に触れるとともに、ふるさと教育を推進するため、地元の産業の滝瓦を用いたのPR活動や打ち豆汁作り体験などを行っている。

③基礎基本の習得のための活動  
 漢字・計算・スペリング・文法の小テストを月一回の頻度で実施している。家庭での学習習慣が身につくように自主学習を実施し、よい内容のノートは全体で紹介して個々の質を高めてきた。

④読書活動の充実  
 毎朝二十分の朝読書を行っている。図書委員による多読表彰や学校司書の読み聞かせにより、貸出冊数や読書時間が増加した。

⑤地域での活動の推進  
 ボランティアカードを作成して、生徒が地域で活動することを評価している。

⑥評価  
 学校評価(年二回)、魅力ある学校づくりアンケート(年三回)を重視している。授業の様子を校長室だよりに掲載して、教職員間の認識を共有化している。

⑦成果と課題  
 よくわかる授業に係る評価は目標を達成している。今後、地域の将来を

担う人材を育成しているとの自覚を持ち、生徒の自己肯定感を高めること、研究の継続性が課題となっている。

◎研究協議

・校長は、「主体的な学び」の実現や、大切にしたいポイントを年度初めにレクチャーし、全教科で実践・評価していく姿勢が大切である。また、主体性は学校生活全体で育てていくことが大切であり、そのために教職員の意識を変えるための手立てはどうかあるべきかが課題となっている。

・言語能力の充実のため、ICTの活用やNIEを進めている。また、教科だけでなく道徳でも話し合いの進め方を指導していくべきである。

・組織的に取り組むために、どういう子供を目指すのか、柱を明確にし、それを伝えるべくシステムを作り上げなければならぬ。

(菅原中 松野信二)

■第二分科会

よりよく生きようとする意思や能力を育む道徳教育の充実  
 ～規範意識を高めるための道徳教育の工夫・改善～

発表者 社中 岩本明裕

◎発表要旨

本校生徒は全般的に子供らしく人懐っこい性格であるが、数年前から生徒指導面で問題を抱えることが多く、特に規範意識の低さに大きな課題がある。

そこで、研究題にある道徳教育の充実と、望ましい集団づくりを図ることが喫緊の課題であると考え、以下のような研究体制を進めてきた。

①学校経営方針と研究体制  
 ○スクールプランでの位置づけ  
 「規範意識の高揚」「学校に誇りと愛

着を持つ集団の育成」「人権教育の推進」を重点化して、特に道徳実践力の向上を目標に掲げて取り組んだ。

◎若手中心の研究体制づくり

前年度までベテラン教員が主任等のポストに就いていたが、研究主任、道徳教育推進教師等に若手を抜擢して、研究推進委員は三十歳代を中心として構成し、校内研究の活性化を図った。

②校内研修と授業実践

○道徳教育推進教師を中心として校内研修を計画的に行なった。

・道徳の教科化について(七月)  
 ・教科書の読み合わせと年間計画の作成(十月)

・道徳の評価について(二月)  
 道徳ノート等に考えたことを記入させることや、同一時間帯に同学年の道徳の授業を行うことなどを共通理解した。

○授業実践(道徳一人一授業)  
 学級担任が必ず年に一回道徳の授業公開を行った。

③教育活動における道徳教育  
 ○人権集会前に一斉道徳を特設し、人権に関する題材で道徳授業を行うことにより、充実した人権集会にすることができた。

○全国障害者スポーツ大会開会式に参加する前に、盲目アスリートの生き方を通して、粘り強く最後までやり抜く強い意志を培うことを目標とした道徳授業を行った。

○校長講話の工夫として、全校集会の講話は、道徳的価値のある内容とし、引用した詩などは、学級担任に渡し学級指導に活用した。

○家庭・地域との連携  
 ・学年通信に道徳コーナーを設けて啓発し、保護者からの感想も道徳に関することが多くなった。

・地域活動として一部活動一ボランティアを行い、必ず振り返りをして、生徒の地域活動に対する意識や意欲



の向上を図った。

④成果と課題

学校評価では生徒と保護者の評価項目において前年度よりもよい結果が得られた。一方でいじめの意識や生活態度については大きな変化が見られなかった。学校は落ち着いた状況になってきているので、生徒を認めていくとともに自己肯定感を高めていく必要がある。

全教員の道徳授業に対する意識は大きく変化したが、さらにねらいに迫る中心発問、授業の流れに関する課題は多いので、さらなる授業研究が必要である。

◎研究協議  
 ○道徳教育を推進する上での組織的な取組について

・二年目の若手を研究の中心として抜擢することは素晴らしい決断であり、協力体制が行き渡っているからこそ成り立っている。

・全校道徳では校長自らが指導に当たるのはどうか。しかし、若手が増えているので校長自らが示範することも必要であろう。

・道徳の評価をどうするかを検討し偏りがちであるが、まずは「考え、議論する道徳」の授業づくりをどうするかが大切である。

・同じ時間帯に道徳を実施することは必ず道徳が実施されてよい。

・小学校の評価とズレがないように、中学校区で道徳の位置づけを共通理

解して行うことは大切である。  
(兼中 坂田浩一)

### ■第三分科会 社会的職業的自立に向けた キャリア教育と 進路指導の充実

連携とガイダンス機能の充実を  
通じた基礎的・汎用的能力の育成  
発表者 小浜中 山田康弘

#### ◎発表要旨

キャリア教育及び進路指導は、教育活動全体を通して行うものである。しかし、その視点をはっきりさせなければ、効果的な成果は得られない。そこで、今回の研究にあたっては、第三分科会の「研究の視点」として挙げられている①「基礎的・汎用的能力の育成」②「教育活動全体を通じた組織的・計画的な進路指導の充実」③「連携・協働した体験活動の充実」に加え、学習指導要領で提唱されている「ガイダンス機能」の充実化して実践を積み重ねてきた。

研究にあたっては、どのような生徒を育てたいのかを校長のビジョンとして教職員に示した上で、進路指導を含む具体的な活動を通して、基礎的・汎用的能力の育成を目指してきた。校長としてのビジョンは目指す生徒像として示してあるが、特に「生きる力」にも通じる生徒の自主性・主体性を培うことに重点を置いてほしいことを年度当初、教職員に研修の場で説明をした。

研究の実践例としては、本校の特色である。四つの活動について紹介した。その中でも特に縦割り活動については、三年生のリーダーシップが学校の伝統として根付いており、基礎的・汎用的能力の視点からも人間関係・社会形成能力の育成につながっている



・体育祭や委員会活動のみならず挨拶運動や避難訓練、ユニークな活動としてNIE教育、小中合同海岸清掃、赤米づくり、左義長祭などを縦割りで実践している学校もある。いかに三年生を育てるかがカギとなろう。小中併設校では小学生も含めて全校

るものと思われる。  
また、連携とガイダンスについては、教育活動そのものを支えるものとして、効果的に機能していると考えられる。そして、その成果として、学校評価アンケートや全国学力・学習状況調査の生活アンケートの結果では、基礎的・汎用的能力に関連した項目で高い評価結果を残すことができた。  
しかし、学校全体で今後キャリア教育及び進路指導の充実をより一層図っていくためには、教職員が基礎的・汎用的能力の視点をもって生徒の指導にあたること、カリキュラムマネジメントによる、意図的・計画的な推進が重要であると考えられる。  
◎研究協議  
「縦割り活動や学校行事を通じた基礎的・汎用的能力の育成について」四つのグループに分かれて各校の取組を紹介しながら協議を行った。以下は協議した内容の報告である。  
・縦割り活動が可能になってきた理由として、生徒の資質が向上してきたことが挙げられる。反社会的行動や荒れが影を潜めるとともにチーム学校としてきめ細かな指導が功を奏してきたのではなからうか。  
・体育祭や委員会活動のみならず挨拶運動や避難訓練、ユニークな活動としてNIE教育、小中合同海岸清掃、赤米づくり、左義長祭などを縦割りで実践している学校もある。いかに三年生を育てるかがカギとなろう。小中併設校では小学生も含めて全校

活動で縦割り活動を実践している。特別支援学校(知的障害)でも週一回終日縦割り活動を行っている。汎用的能力が高まっているかを実証するのは難しいが事例研究を重ねている。  
◎成果と課題  
小浜中学校の実践は校長としてのビジョンが職員に浸透していてどれも素晴らしい。「将来の夢や目標を持つていく」「人の役に立つ人間になりたい」「問題解決に向けて自ら取り組んだ」では高い数値を示し成果を証明している。  
キャリア教育は、小中連携はもとより福井県が推進している十八年教育を意識しながら進める必要がある。そして、この実践が自己有用感や自己肯定感の涵養につながっていくのかを検証していく必要がある。  
(上中中 竹内久典)

◎発表要旨  
本校教員は、二十代と五十代で全体の半数以上を占める構成となっている。また、女性教員の割合が約二割となっている。このような現状から、若手教員や中堅教員の育成、さらには次期管理職候補となるミドルリーダーの育成は、喫緊の課題と言える。そこで、特に重点的に取り組んできたことを紹介する。  
①若手教員の育成に向けた校内OJTの工夫・機能化  
・学年主任との面談や主任会での情報交換など、同学年所属の学年主任・

### ■第四分科会 多様化した学校教育課題に 対応できる教員の育成

質の高い教育を実現するための  
人材育成の推進  
発表者 松陵中 岩崎一男

副主任を活用しての指導や目標管理表を用いての校長面談等における指導などを計画的に進めた。  
・継続的な授業参観と事後面談、さらには初任者研修指導教員との定期的な面談・情報交換等を通して、初任者への指導を推進した。  
・中堅教員と若手教員との「バディ方式」による研修体制を構築し、適宜指導・助言を行った。またこれにより、同僚性の構築も進めた。  
②県教委の事業「教員自主研究活動支援事業」の活用  
・研究グループに対しては、最初に学び続けることの重要性について訓示した。その後の指導・助言等の介入は最小限に留め、グループの自発的・自律的な研究体制を確立させた。  
③「学び続ける教員集団」の構築に向けた取組  
・教科指導や防災教育などにおいて、外部講師を招聘した研修会を開催して、教職員の各々に関する知識・理解の充実を図った。  
・教職員対象として定期的に「研修通信」を発行して、教職員の資質・能力の向上を目指した。  
④家庭の教育力を高める学校の関わり  
・保護者向けの通信を月2回程度発行して「親としての不安や悩みを解消するための一助とした。  
・生徒と保護者が一緒に、命の尊さ、大切さなどを考える親子道徳を実施した。  
⑤「地域連携・協働型教育活動」の推進  
・ふるさとPRや環境保全活動、伝統行事への参加など、地域の教育資源を活用した教育活動を積極的に実施した。  
⑥成果と課題  
・互いの課題を共有し、協働しながら解決・改善に向かう姿勢が見られるようになった。

・学年の枠を超え、職員室内で気軽に相談し合う姿が見られ、職員間のつながりは確実に強化された。  
・研修に対する意識改革が図られ、自律的に研修に向かう姿勢や意欲、機動力が高まった。  
・今後は、活用力重視型への意識転換が必須である。  
・管理職が組織をマネジメントし、自主的・自律的な研修体制をいかに築くかが重要になる。  
・県の研修システムを教育活動にさらに活用することが必要である。  
◎研究協議  
・教職員全体に教育方針を確実に浸透して実践するためには、ミドルリーダーを中心とするミドル・アップダウン・マネジメントが有効である。  
・教科の枠を超えた授業研究などを進めることにより、同僚性がさらに充実したものになる。  
・新たなものを作るという考えではなく、今ある現状や環境などを活用しての同僚性育成が効率的である。  
・新たな教育が求められる中、学校教育として変えてはいけないものを大事にしていくべきである。  
・校長として、ぶれることなく、筋の通った学校経営の実践こそ大事にしなければならぬのではないか。  
(東浦中 辻村 完)



・学年の枠を超え、職員室内で気軽に相談し合う姿が見られ、職員間のつながりは確実に強化された。  
・研修に対する意識改革が図られ、自律的に研修に向かう姿勢や意欲、機動力が高まった。  
・今後は、活用力重視型への意識転換が必須である。  
・管理職が組織をマネジメントし、自主的・自律的な研修体制をいかに築くかが重要になる。  
・県の研修システムを教育活動にさらに活用することが必要である。  
◎研究協議  
・教職員全体に教育方針を確実に浸透して実践するためには、ミドルリーダーを中心とするミドル・アップダウン・マネジメントが有効である。  
・教科の枠を超えた授業研究などを進めることにより、同僚性がさらに充実したものになる。  
・新たなものを作るという考えではなく、今ある現状や環境などを活用しての同僚性育成が効率的である。  
・新たな教育が求められる中、学校教育として変えてはいけないものを大事にしていくべきである。  
・校長として、ぶれることなく、筋の通った学校経営の実践こそ大事にしなければならぬのではないか。  
(東浦中 辻村 完)

# 中学教育に

# 清風

## 新入会員だより

### チーム至民とともに

至民中学校長 小林真由美



曲線空間が織りなす三枚の葉っぱの形の学び舎、至民中学校に赴任して、この校舎を歩くと、そこに込められた様々な人たちの熱い思いをしみじみと感じます。今、この至民に生きる私たちは、この思いを大事に背負っていかねばならないと思っています。

折しも新たな時代の始まりとなった令和元年の赴任に当たり、私は学校教育目標を「未来につながる学力の育成」に変えました。今を必死に生きる生徒たちに、「自分の未来を見つめてほしい」、それを支える教職員や地域の皆様には、生徒に「社会で通用する力を育んで欲しい」とそんな思いを託しました。令和時代の最初の授業では、全校道徳としてその思いを伝えてみました。

大変な仕事ではありますが、私には、すばらしい教職員と、サポート至民をはじめとした温かな地域の人々、活気ある保護者の皆様、福井大学をはじめとした心強い応援団、そして何より、輝く瞳で元気に笑顔を交わす三七一人の生徒がいます。みんなで一緒に、すてきな学校を創っていきます！

### 魅力ある学校に

灯明寺中学校長 塩谷 圭司



本校は、すぐ横に九頭竜川が流れ、両岸沿うように広がる住宅・商業地域や田園地帯が校区です。今年度の生徒数は五七二名で、来年度には教室が足りなくなるくらい生徒数が増えてきています。

十一年ぶりに灯明寺中学校に勤務となりました。教室をまわると、当時の生徒たちとの思い出が蘇ってきます。当時始めた「灯中ソラン」や「灯中三黙(黙読・黙働・黙想)」が今の生徒たちに伝統として受け継がれていることもとてもうれしく思いました。

今年度、全ての生徒にとって魅力ある学校を目指し、中学校区の小学校と連携をとりながら、生徒たち全員が「学校に来るのが楽しい。」と言える学校づくりをしていこうと考えています。PTA総会時の授業参観では、全てのクラスで「みんなってすごい。自分もすごい。」という授業(ピアサポートプログラム)に取り組みました。学校全体で生徒たちのために頑張ろうという姿が見られ、とても頼もしく思いました。生徒たちだけでなく教員も主体的に学び・行動する集団になるよう、校長として日々努力していきたいと思えます。

### 文武両道と地域社会への貢献を目指して

川西中学校長 齊藤 浩之



昭和二十六年に、水切古墳のある緑に囲まれた小高い丘に赤い瓦屋根がひとつわ生えるモダンな校舎が完成した。当時の地区の人々の感激は校歌の歌詞に込められて

ている。また、校舎の面影も前庭のモニュメント「赤鷲」に残され、福井市川西中学校の素晴らしい歴史と伝統は確実に受け継がれている。頼もしい限りである。

令和元年は、全校生徒一四〇名、教職員二〇名でスタートした。目指すは「文武両道と地域社会への貢献」。

一つ目の「文武両道」は、中学生の溢れんばかりの青春のエネルギーを学業と部活動に思い切り向けさせたいとの願いからである。「師弟同業」で地道な努力を積み重ね、中学生としての力量、教職員としての力量を少しずつ確実に高めることで生きる力を育んでいく。

二つ目の「地域社会への貢献」は、地域の中で、生徒と教職員が地域の方と協働で地域に根ざした体験活動を重ねることによって郷土愛を育んでいく。

### 地域の信頼に応える学校を

足羽第一中学校長 小林 孝史



本校は福井市の南東部に位置し、北は足羽川、南西には文珠山を仰ぎ、四方を田園に囲まれた自然豊かな環境の中にある学校です。校区が広いため、生徒全員が自転車通学です。

平成三十一年度は一三三名の新入生を迎え、全校生徒三三二名でスタートしました。

校区には六小学校、公民館があり、ここ三、四年は地域と連携し積極的に地域活動に生徒たちが参加しており、地域と共に教育活動を行っています。また、歴史と伝統のある母校訪問駅伝は今年で五十四回目を迎え、今や地域の一大イベントとして定着しています。

「豊かな心を持ち、たくましく生き抜く生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、心豊かで思いやりのある生徒、自ら学び共に学び合う生徒、地域に誇りと愛着を持つ生徒をめざして教育活動を行っていきます。なかでも、「主体的・対話的で深い学び」の実現のための授業改善に力を入れていきたいと考えています。

### 挑戦し学び続ける学校をめざして

福井大学教育学部附属義務教育学校 後期課程副校長 永廣 裕子



本校は、小中一貫校の義務教育学校になって三年目を迎えます。昨年度は前期課程と後期課程の合同職員室である中央棟が完成しました。現在は、教職員五〇名がチーム附属となって子供たちの成長を支えています。

教育目標を「未来を創る自己の確立」とし、これまで「探究」と「コミュニケーション」を大切に協働探究学習の実践研究に取り組んできました。さらに、新研究体制となり、九年間の「主題」探究「表現型」プロジェクト学習の力にキエラム開発に取り組んでいます。

授業づくりをはじめとして、共に活動する機会が増え、今まで以上に時間をかけて話し合うことが多くなりました。大変なこともありますが、集会では二つの美しい校歌が歌われるなど、九年間の子供たちの成長を直に感じることができ、幸せや喜びは倍以上のものとなりました。

今後、子供たちにとって何が一番良いのかを第一に考え、納得いくまで話し合いを繰り返して、挑戦し学び続ける教師集団になるよう、副校長として日々研鑽

していきます。

### 平和の楽園

福井大学教育学部附属特別支援学校 副校長 小川 晶裕



本校は、福井県下で最初の知的障害児を対象とした特別支援学校として開校しました。

小学部、中学部、高等部と合わせて六〇名の小規模校で、アットホームな学校です。校舎外壁には、全国でも珍しい大きな壁画(囃囃作:「平和の楽園」)が鮮やかな色彩で描かれており、この壁画が表現している「楽しくて暖かい夢の世界」を本校教育の象徴として、小学部入学から高等部卒業までの十二年間を通して「生活教育」や全校児童生徒が縦割り集団で活動する「レインボータイム」を実施しています。

私の学校運営のモットーは、魅力ある学校づくりです。子供たちが通うのが「楽しい」と言ってくれる学校、保護者の皆様「安心」して任せられると言ってくださる学校、そして学校の中に子供たちや教職員、スタッフさんたちの「笑顔」があふれる学校をつくっていきたくて考えています。学校の働き方改革とあわせて、少しずつでも着実にすすめていけるよう努力していきたいと思えます。なにとぞよろしくお願ひいたします。

### 初心忘れず

鯖江中学校長 大久保文義



本校は、鯖江市の東側の西循環線沿いにある、生徒数八〇四名の大規模校です。

二十一年前に勤務したときには周りは田畑ばかりでしたが、今では様々な店やアパートが建ち並び様変わりをして

います。

異動が決まり引継ぎに学校に訪れた際、まずは校舎内を一周。本校の信条でもある「誠実・英知・健康」が各教室や体育館にあり、校舎内は昔のままでした。次に近道を流れる日野川沿いを歩き、そして校庭の桜を見、地域と方々との会話の中で、この学校の本流は変わっていないことに、身が引き締まる思いでした。

本校が現在の場所に移転してすぐに勤務となった頃、諸先輩方からは、生徒が主役の学校であること、地域の協力を得てこそこの学校であることなど今の学校教育にもつながる話をことあることに聞いていました。

私の教師生活の根幹を作ってくれた学校に校長として戻ることとなり、大変幸せであると同時に緊張もしています。あたりまえのことを丁寧にか一杯取り組むことを忘れず頑張りたいと思います。

## 地域と共に

越前中学校長 佐々木昌広



「人と技 海土里織りなす快適なまち」越前町の西部に広がる海岸沿いに位置する本校

は、全校生徒七一名、特別支援学級を入れて五学級でスタートしました。十一月に入ると必ず有名タレントが漁港からテレビ中継を行い、豪華な力二料理を紹介しています。若者の地域離れが進み空き家や玄関が閉じられたままの旅館・民宿も多くみられます。地域の方からは、越前地区のよさを再認識し、地域の自慢をたくさん見つけ、地域を愛する生徒を育ててほしいとの要望と、そのためにどんな協力でもさせてもらうという力強い応援の言葉をいただいています。

教育目標「自ら求め、自己を磨き、高めあう生徒の育成」に向けて、地域の人材

や施設を活用し、地域と共に愛情をもって生徒を鍛えていきたいと思いでいます。農業・商業・工業に加え、漁業・仲卸業・旅館業といった幅広い職種を地元で体験する職場体験や観光地としての地元に貢献する浜清掃など特色ある教育活動を展開しながら、人情に厚く地域を愛する「浜の子」を育てていきます。

## 地域と共に

万葉中学校長 青山 亨



越前市万葉中学校は、平成八年度に新設された市内で最も新しい全初中学校です。校区には北陸自動車道武生ICがあり、北陸新幹線南越駅(仮称)の建設も進み、今後益々発展していくと思われる地域です。

本校の名前から分かるように、校区には万葉集にもゆかりの深い地域があり、開校二年目から、地域の方々の手助けにより赤米という古代米を栽培し続けています。収穫した赤米を生徒たちは、食する他に、『万葉まつり』という地域の大きな祭で販売し、祭を盛り上げています。また、多くの一年生が祭の時代行列にも積極的に参加しています。

本校の生徒たちは、このような赤米活動以外にも地域の歴史や文化、自然、企業などを訪問・調査したり、公民館へボランティアに出かけたりなど地域の方々からいろいろな学び、育てていただいています。このような活動を通して、地域に参画できる生徒を育成するとともに、将来、地元で貢献できる大人になれるよう教職員一同全力で取り組んでいきたいと思ひます。

## 想いを大切にしていこう

### 学校をめざして

武生第三中学校長 澤崎 秀之



本校は越前市の中央部に位置し村国山と日野川の清流を前にした豊かな自然環境に恵まれています。本年度の入学式は、晴天にも恵まれ、日野川堤防沿いの美しい桜が咲き誇り、新入生を歓迎し、全校生徒三三三名の新年度のスタートにもまさに花を添えました。

本校は「正しく」「明るく」「たくましく」をモットーに、めざす生徒像の実現に向けて、地域やPTAと協働するボランティア活動の充実など、主体的・対話的で深い学びを推進しています。主体的な学びの実現は勿論のこと、村国山の清掃活動や菊花マラソンの伴走ボランティア、赤ちゃん抱っこ体験などを盛り込んだ「いのちのぬくもり体験学習」などの教育実践に取り組んでいます。

また、本校には創立五〇周年を迎えたいに願ひや想いを込めて作成した三中キヤラクター「武三郎」と「さくら」も生徒会活動のシンボルとして学校行事や地域の方との交流の際に大いに活躍しています。生徒の想いや保護者の願い、地域の想いを大切にしながらこれからの学校づくりを教職員一同進めていきたいと考えています。

## 今言葉は「六中あいうえお」

武生第六中学校長 片山 幹子



本校は、越前市の南部、王子保地区にある全校生徒一八三名の学校です。「学び合、支え合う生徒の育成」を研究主題に、教職員十八名が「丸」となつて日々の教

育活動に取り組んでいます。また、今年度は、生徒会のテーマが生徒と教員の合言葉のように使われるようになりまし。テーマは「六中の『あいうえお』をよくしていこう」です。

「あいうえお」とは、「挨拶・居心地・歌声・笑顔・応援」のこと。生徒総会でこのテーマを聞いたとき、私は自分の目指す校風を生徒たちがスバリ言い当ててくれたような気がして感動しました。どれも人との明るく温かい関わりを感じさせる言葉です。担当の若手教員は総会でどうコメントしました。「皆でよく考えたね！応援される人は、人を一生懸命応援する人でもあるんだね。そこに気が付いたのはすごい！」若手ながら、生徒たちの考えを深い意味に価値付けして返していました。

この素敵なテーマを生徒たち自身の手で実践できるよう全教職員でサポートしてまいります。そして家庭・地域とも連携しながら、王子保の学校として、よりよい校風を創ってまいります。

## 質実剛健

越前市南越中学校長 牧田 善浩



越前市の東部、今立地区に位置し、自然に囲まれた中に本校はあります。全校生徒が二九七名の中規模校で、今立地区唯一の中学校ということもあり、地域の期待は大変大きなものがあります。

本校の校風は「質実剛健」で、「地味で飾り気がなく、達者で健やかに育つて欲しい」という願いが込められています。学校教育目標は、「未来を拓く英知と豊かな心を培い、たくましく生きる生徒の育成」です。これらを実現するために、日々の教育活動を行っています。また、本校の特徴として以前から部活動が大変盛んで、これまで数々の輝かしい成績を残してきました。その伝統もあつて

か、学校は大変活気があり、生徒も生き生きと活動しています。しかし、喫緊の課題として、教員の業務改善が求められ、部活動時間の制限や休養日の設定など、学校全体で取り組む必要がありま。そのような中で、短時間でも効果的に成果の上がる活動について先生方と研究しながら、生徒が目標を持って意欲的に取り組む、達成感を味わうことができるよう、努力していきたいと思ひます。

## 魅力ある学び

東浦中学校長 辻村 完



本校は全校児童生徒二七名の小・中併設校で、次の特色ある三つの学びがあります。

一つ目は、小中一貫教育です。つねに小・中学校のつながりを意識した教育活動が行われており、体育大会や生徒会・児童会主催の行事、清掃活動などでは、自然な交流や学び合いがあります。教職員についても、小中一貫を考慮した授業づくりや、生徒指導面での効果的な指導が見られます。

二つ目として、少人数指導があります。小学校は複式学級ですが、ほとんどの授業を単式で行い、教科担任制に近いものを実施しています。さらに、全学級で習熟度別学習を展開し、個別指導を充実させることにより、生徒一人一人の優れた能力を着実に伸ばしています。

三つ目として、地域学習があります。地域の方による強固な支援体制によって、地域学習が充実しています。地域の活動に参加するだけでなく、これからの地域についても深く考えられる絶好の機会となっています。

これら三つの学びは、伝統ある学びであるとともに、時代の先端を行く学びであるとも言えます。今年度、さらに魅力ある学びを増やすことに力を注ぎます。